恋のLesson実践編

vol.1
「まつりお姉ちゃんの恋のLesson実践編！なのです！」
「え～？」
「それはどういう反応なのです？」
「なんていうかまつりさんは～、お姉ちゃんってカンジとはちょっと違うかな～って」
「ほ？どういうことなのです？」
「違います違います。もっとこう……まつりさんはお姉ちゃんっていうより先輩ってカンジです」
「それは褒めてるのです？」
「褒めてますよ～！」
「まったく。これだから翼ちゃんは…」
「え、何か言いました？」
「ううん。素直で可愛い後輩だなって思っただけなのですよ？」
「本当ですかぁ～？」
「本当なのです」
「じゃあちゃ～んと、育ててくださいね？」

vol.2
四人席のテーブル。二人は斜めでも隣でもなく、きっちり向かい合って座っていた。
「じゃあ、今日のテーマを確認するのです。ええっと…彼氏ができた時に、初デートで挙動不審にならないための練習？ちょっと考えた人とお話ししてくるのです」
「まあまあまあ、私がお願いしたんですよ～！まつりさんならきっといいアドバイスをしてくれるからって！」
「う～ん…まあもう席についてるし進めるのです。まず大事なのは、会話のテンポと距離感！近すぎると不自然だし遠すぎても壁を感じちゃうのです」
「今くらいだとデートっぽくないですか？」
「対面だと面接感が出ちゃうのです」
「面接？」
「趣味は何ですか、休日は何してますか、弊社を志望した理由は？」
「嫌な初デートですね…」
「でしょ。だから、緊張しすぎないことを心がけるのです」
「あと、褒める時は自然に！急に大げさに褒めると練習しました感丸出しになるのです！」
「まつりさんの今日の服、めちゃくちゃ似合ってます！」
「すっごい練習した感出てるのです！丸出しなのです！」
「え～難しいですよ～！」
「でも、気持ちは悪くはなかったのです」

vol.3
「今の褒めは何点ですか？」
「六十五点」
「え～？」
「伸びしろ込みなのです」
「でもまつりさん、ちょっと嬉しそうですよ？」
「そんな事ないのですよ？」
翼ちゃんはくすくす笑って、それから椅子を引いた。
「あ、ちょっとエチケットタイム行ってきま～す。戻ってきたら第二部ですね」
「なんの第二部なのです？」

「実践編の？」
「それはまだ早いのです」
「行ってきまーす」
まつりは翼の背中を見送りながら、アイスティーを一口飲んだ。

vol.4
「お待たせしました～」
戻って来た翼ちゃんは髪が少し整っていた。唇には、さっきよりほんの少し色が乗っていた。
「……あれ、そっち？」
「はい」
「元の席、向こうだけど」
「知ってます」
「知ってて座ったの？」
「はい。まつりさんのアドバイス通りに」
「私、隣に座れとは言ってな「距離感が大事って言ってました。対面だと面接っぽいって」
「言ったけど」
「なので、実践で～す♡」
「改善が早い」
翼ちゃんは満足そうに笑い、メニューをまつりの方へ寄せた。肩が少し触れた。

vol.5
店員が水を注ぎに来て、二人を見て微笑んだ。
「ご注文お決まりですか？」
「あ、はい。レモンタルトと桃のパフェをお願いしま～す」
「お取り分け用のお皿もお持ちしましょうか？」
「えっ」「あ、お願いします」
先に答えたのは翼ちゃんだった。
「…シェアする流れになったね」
「デートっぽいですよね～」
「それはずるいのです」
「練習、ですからね♡」
「本当に便利な言葉なのです」
「まつりさんも一口食べますか？」
「初デートで一口交換は相手によっては攻めてるのです」
「じゃあこれは二回目のデート練習！です」

vol.6
デザートが運ばれてくる。レモンタルトと桃のパフェ、取り分け皿も一緒に置かれた。
翼ちゃんはスプーンを手に取り、少し考えてからまつりの方を見る。
「こういう時って、先に自分のを食べるべきですか？ それとも相手に勧めるべきですか？」
「正解はこれ！とは言いづらいのです。でも自然に一口勧められると好印象かもしれないのです」
「なるほど～？」
「でも押しつけはNG！なのですよ」
「は～い」
翼ちゃんは桃のパフェを少しすくり、まつりの方へ差し出しかけて途中で止まる。
「じゃあ、これは？」
「……それはちょっと攻めすぎなのです」
「ですよね」

「でも悪くはないのです」
「何点ですか？」
「七十点。ちゃんと止まったから」

vol.7
「じゃあこれはまつりさんのお皿に置きます」
「うん、それが平和」
翼ちゃんは取り分け皿に桃を置き、まつりはそれを受け取りながら少しだけ笑った。
「翼ちゃんの成長が早くて戸惑っちゃうのです。可愛げがあるんだか、ないんだか」
「え～ありますよ～」
「そこ自分で言っちゃうのです？」
「だってまつりさん、素直な後輩が好きそうだから」
「……それ、誰情報？」
「私の観察で～す」
翼ちゃんは楽しそうにパフェを食べ、何でもない調子で続けた。
「でもまつりさんはちゃんと見てくれてますよね。嬉しいな～って思って」
「当然！なのですよ。お姉ちゃんに任せるのです！」
「頼りになりますね、お姉ちゃん」

vol.8
「……それ、今使うの？最初は違うって言ったのに」
「まつりさんはお姉ちゃんってカンジとは違うかな～って言いましたね」
「言ったね」
「でも今は、ちょっとそんなカンジかなって」
「……どういうカンジ？」
「面倒見がよくて、頼れて、ちょっと照れ屋さんで」
「最後はいらないのです」
翼ちゃんは笑った。まつりはレモンタルトをフォークで切るふりをしながら、視線をそらす。
「冗談で言ったのに」
「私はちゃんと覚えてましたよ？」「そういうところ」
「だめでした？」「だめじゃない」
「じゃあ呼んでもいいですか？」「今後ずっと？」「たまに♡」
「たまにが一番心臓に悪いのです」
「じゃあ、効いた時だけにしますね」